

12. 黒沢 文貴氏

くろさわ・ふみたか 東京女子大学地域文化学科教授

日時：2002年3月7日

出席者：伊藤隆 季武嘉也 有馬学 中見立夫 小池聖一 伊藤光一 戸高一成
西川誠 駄場裕司 矢野信幸 赤川博昭 黒澤良 小宮一夫 西藤要子
鹿島晶子 大久保文彦 土田宏成 高橋初恵

伊藤 開始時刻を少し過ぎましたので、来ていない人もいますが始めます。

きょうは黒沢文貴さんに、「浜口雄幸、奈良武次の日記等復刻作業について」と、「GHQ歴史課陳述録について」という題でお話をいただくことになっています。時間は1時間半ですが、もっと長くなってもいいですから、タイトル以外のこともいろいろお話しいただければと思います。

黒沢 黒沢でございます。こういう場でお話をさせていただく機会を与えていただきましたことに感謝申し上げます。どうもありがとうございます。先月でしたか、伊藤先生からお電話をいただきまして、あまり深く考えもせずにお返事したわけですが、あとでいままでの報告書を拝見させていただきましたら、皆さんがお知りになっているいろいろな情報が述べられている。それに対して私は情報も乏しい人間だと思いますので、この場にそぐわないような話になるかもしれませんが、ご容赦をお願いしたいと思います。

それでは、ただいま伊藤先生から本日のテーマについてご紹介がありましたが、その前に私がどういうことをやってきたかということも含めて、お話をさせていただきます。私は特に陸軍を中心に研究をしてみましたが、史料的には防衛研究所の史料を中心に漁っておりました。それ以外のところでは、波多野勝さん、あるいは以前ご報告なされた櫻井良樹さんなんかと、いろいろな史料集を出すきっかけを与えていただき、それに従事してまいりました。

そこで、いままでどのような史料集にかかわってきたのかをお話いたしますと、そもそものきっかけは、20年くらい前に海軍大将の竹下勇を波多野勝さんたちと一緒にやりはじめたことです。その後、明石元二郎文書の一部を、慶應大学の法学研究に掲載いたしました。それから、黒竜会関係史料集を柏書房から全10巻で出しております。また、内田良平の関係文書を芙蓉書房出版から全12巻出させていただきました。長岡外史の関係文書については、すでに櫻井さんからお聞き及びのように、長岡外史顕彰会という、岡田さんという方がお一人でやられている、そのところが印刷所であったということで、史料集の出版というのはなかなか難しいわけでありまして、そこで印刷していただき、吉川弘文館発売となりました。それから『日露戦争と井口省吾』を原書房から出版いたし

ました。井口省吾の史料は、私たちがやる時には大部分防研に寄託されていたと思いますが、ご遺族の方が、私たちがやるということで引きあげられて、仕事が終わったところで防研のほうにまた寄託されたことと思いますが、現在の状況は存じません。また、長年やっておりました竹下勇は、知名度等の関係もあり出版が難しかったのですが、ご遺族の資金的な協力をいただき、『海軍の外交官 竹下勇日記』という題で、芙蓉書房出版から出版させていただくことができました。

どちらかといいますと、いままでに従事した史料集は、日露戦争を中心にした辺りの軍人さんのものが、非常に多かったのではないかと考えておりますし、そういったものを櫻井さんとか斎藤聖二氏たちと一緒にやっていたわけです。

その他のところで言いますと、浜口雄幸の日記があります。これは本来ですと、私たちなどがやるよりは伊藤先生がおやりになるべきものだったのだらうと思いますが(笑)、私どもがやらせていただくことになったわけでありまして。これは、みすず書房から『浜口雄幸日記・随感録』ということで出版いたしました。

浜口日記については、中をお読みいただいた方はお分かりだと思いますけれども、少し期待はずれと言いますか、非常に浜口らしく淡々と書かれております。読みようによってはもちろん、いろいろな情報の取り方がありますので有益だとは思いますが、一見するとどうもあまり面白くないということで、みすず書房では当時、高橋正衛さんが最初編集の担当をなさっていたわけですが、困ったなということでした。それで日記だけですと量的にも若干少なかつたこともあり、また、随感録を一緒につけますと日記の内容や彼の人物像もより鮮明になってくるのだらうということで、随感録をぜひ付けようということになったわけです。

それからもう一つ、これについてはまた後でいろいろとご教授いただければありがたいのですが、そういった淡々と人物の往来などが記された日記ですので、できるだけ編者注は詳しく付けたほうがいいだらうと思ひまして、できる限りの範囲と申しますか、本来ですと、この人物に確定しうるかどうかわからない人物が中にはいるわけでありまして、前後関係などから見ておそらくこの人物で間違いのないと思われるような人は、どんどん積極的に入れていくという方針で人名注などは付けました。それから、事項につきましても、たとえば浜口が狙撃された以降の日記のところ、誰それにある用件の手紙を書くといったような記述がありますが、この用件が何か分かればよろしいわけですから、そういうところは伊藤先生のご本や研究なども参考にさせていただきながら、これはもうこのことに間違いのないだらうという、たとえば、総裁辞任の問題などについてですが、そういった事項もなるべく積極的に入れようということで編者注をつけたわけです。そういったところが、編者として少し工夫したところだと思いますし、あとは史料の補足の意味で、浜口の人物像や考え方を浮き彫りにする少し長めの略歴・解説と申しますか、人物伝を入れております。

浜口に関しましてはその後、私自身は人物叢書を執筆させていただけることにもなっておりますので、他にもいろいろな史料がないかということで、若干探しております。それで二度ばかりですけれども、浜口日記を出版した後、高知県へまいりまして史料を探して

おります。そのときにお助けいただいたのは、自由民権記念館の筒井さんという非常に熱心な方で、多分皆さんの中にはご存じの方も多いと思いますが、筒井さんのご協力をえて高知県でいろいろな調査をさせていただきました。特に私が最初に行ったときには、ちょうど浜口の没後60年が過ぎたところで、民権記念館で浜口展が開催されたということと、浜口の五台山の麓にあります生家が修復されて一般公開されるという、ちょうどそういうタイミングもありまして、いろいろ教えていただいたということです。

その後もう一回伺ったわけですが、そういったところで感じましたのは、史料があちこちに眠っているのではないかとということです。高知県は土佐史談会の歴史などもあり、歴史について興味をもたれている方が非常に多いということかもしれませんけれども、筒井さんに案内していただいて見て回ったときに、たとえば高知市の職員の方の家をお訪ねしましたら、そこに掛けてあった額がそのまま浜口の書簡だったりしました。それで、中身を見ましたら面白いということで、写しとってきたというようなことがあります。その書簡については以前、日本歴史にも紹介させていただきましたが、そういったものが非常に多かったような気がします。

それから、日本歴史で紹介させていただいた中には、加藤高明の衆議院議員総選挙に関わる書簡がありますが、これもたくさんの掛け軸を集めておられる愛好家の方が持っておられました。そういう方々のいろいろな情報が、浜口展をやるということで民権記念館に集まっていたわけです。

それから、浜口家のほうも非常に立派な形で現在も見学ができるようになっておりますけれども、その近くに竹崎音吉という大蔵省の浜口の後輩になりますけれども、その方のご遺族が経営されているお店がありまして(笑)、そこに史料が展示してあって、日記などもそこに展示されていたんです。その中から浜口関係のものをざっと見させていただきました。ざっとですから全部キャッチできませんでしたが、浜口との関係が出てくるところについてはメモさせていただきました。

また、二回目に行きましたときには、これも日本歴史で紹介させていただきましたけれども、鈴木商店の金子直吉の書簡を見せていただき活字にさせていただきました。ですから、まだまだ探せばいろいろな史料が出てくるのかなという感じをもちましたし、そういったことは各地方でも多いのではないかと思います。

次に奈良日記にまいります。これも本来ですと伊藤先生が関係なさったんだろうと思いますので、私はある意味でいうと落ち穂拾いをしているようなことになると思います。これについての直接の関係というのは、NHKで『ドキュメント昭和』というシリーズが以前ございましたけれども、そのときにNHKのプロデューサーの方がいろいろな史料に関係され、その一貫でタイミングもよかったのだと思いますけれども、奈良家から、史料を見せてもいいし出版してもいいということでお話がありまして、関係することになったわけです。

そこで、平成2年に中央公論に二度に分けて日記抄を掲載させていただき、その後、中央公論社で出版の予定でしたが、いろいろと繰延べしているうちに『高松宮日記』が出ることになり、『高松宮日記』が完成したら中央公論社自体がどうも怪しくなってしまったと

ということで結局、出版のめどがたたなくなってしまったわけです。それで、なかなか出版社も決まらなかったのですが、確か97年頃だったと思いますけれども、柏書房から出してもいいというお話がありまして、それ以降、出版に向けての活動を再開いたしました。これは、起こす作業は大体その前に終わっていたのですが、柏書房とのお話が具体化してから結局、『侍従武官長奈良武次日記・回顧録』という形で出版になりましたのは2000年ということですので、いずれにしても皆さまを大分待たせてしまったことになるかと思えます。

奈良日記を出すにあたって非常に苦労したのは、編者注をどの程度、どういうふうに付けるかということでした。特に宮内省関係のところ、なかなか付けにくいところだなと思っていたのですが、たまたま私が書陵部に在籍していたこともありまして職員録等がございましたので、そういったものが編者注を付けるにあたっては非常に役に立ったわけです。

なお、編者注については、分かりにくい宮中関係の用語などについても付けたほうがいいだろうと思いましたが、そういったところにも付けるようにしました。また、新しい試みとしては、適宜繰り返しといたしますが、人名注は繰り返し、繰り返し入れております。普通ですと年度はじめの初出のところに付けるやり方が一般的かと思えますけれども、奈良日記を見ておきますと、それだけでは非常に分かりにくいのではないかということで、この人はどういう人だったのかをいちいち前に戻って見るよりは、途中でも入れていったほうが便利なのではないかと思い、かなり繰り返し入れたということです。これについては、特に良かったとか悪かったという読者の感想は耳にしておりませんので、私自身それが良かったのかどうかは分かりませんが、考え方としてはそういうことで繰り返し入れております。

それから、奈良家の史料については、最初は大正初年以降の日記を拝見いたしました。それで、できれば全部出版したいと思ったわけですが、とても量が多すぎるということで、いちばん興味をもたれると思われる東宮武官長と侍従武官長の時期を対象を絞ったわけがあります。そこで何度かお伺いしているうちに、「他に史料はないのですか」といつもお聞きしていたところ、「もうちょっとあります」ということでみせていただきまして、日記回顧録の第四巻に今回刊行分以外の日記・手帳類ということで紹介いたしましたけれども、54冊分の手帳とか日記がまだあることがそこで初めて分かりました。それ以外、書簡類などについては、終戦直前に奈良家が空襲で焼けておりますので、どうもないようです。ですから、おそらく手元にあるものは全てお示しいただいたのではないかと考えております。

ただ、ここで一つ問題がありました。回顧録の原本が実はなかったんですね。これについてはご存じの方も多いかと思いますが、どうしてないのかは確定できませんので、あまり申し上げるようなことではないと思っております。それで、いちばん原本に近いコピーは結局、防研に入っているものということになります。ですから、この本で汚れなどのために何箇所か判読できなかったところは、原本を見ればもしかしたら読めるかもしれませんが、いかんせんコピーしかないということでどうしようもなく、とにかく読めない。あ

るいはコピーの仕方で、昔はよくあったことですが、綴じ代の部分がよく出ていなくて読めなかったところも若干ありまして、そのような部分がここで判読不能になっているものになるわけです。

奈良の史料については、今回活字にしました以外の部分も非常に内容のあるものだと思いますので、もしどこかいい出版社がございましたら、ご紹介していただければと思います。

次に、『GHQ歴史課陳述録-終戦史資料』というものを原書房から2月に出版いたしました。ここには1冊しか持ってまいりませんでしたけれども、この厚さで上下巻です。それで、これもご存じの方が多くかと思いますが、栗原健先生と波多野澄雄さんがおやりになられた『終戦工作の記録』にもかなり使われておりますし、その他、サンケイ新聞から出された本とか、小磯国昭などについては確か歴史と人物でご紹介があったかと思いますが、以前から知られているものだと思います。それから、木戸幸一さんに関してはもちろん『木戸幸一日記』の中でも紹介されています。編集を始めたきっかけは、大井篤さんとの関係です。陳述録が防研にかなりの量入っているということを私どもはつかんでいましたが、GHQ歴史課におられた大井さんといろいろとお話している中で、ぜひ活字にしたいと大井さんもおっしゃられていたこともあり、大井さんのお宅に伺ったことがある方も多いかと思いますが、大井さんは非常に立派に書庫を整理されておられまして、GHQ関係のものもご自身でよく整理されてもっておられたので、そういったものと防研に所蔵されているものとを合わせて出版しようということになったわけです。

防研に入っております史料の来歴については、復員省関係のものが防研の所蔵史料として一つの流れがありますので、その一貫で入ったのだろうということになります。しかし、この解説にも書きましたが、防研で実際にいま見られるのは、陳述書の綴りの6巻から9巻ということになります。それ以前の1巻から5巻が当然あることになるかと思いますが、実際に防研が綴りの表紙に6巻から9巻と付けておりますので、1巻から5巻は当然あったはずなのですが、理由はよくわかりませんが見ることはできませんでした。先生はこれについて何かご存じではないでしょうか。

伊藤 いやあ……

小池 防研の中の書架に入ったことがありますか。

黒沢 書架に入ってまで調べることは当然できませんから。

小池 僕が見たときにあったような気がするんですよ。見学では入れますよ。それで、あそこはもう一つ奥があるんですよ。

黒沢 それは未整理のところですね。それが、ベテランの方がお亡くなりになったりリタイアされたりで、分からない状態になっているんですね。ですから、そこに入っているのかなということぐらいしか分かりません。

小池 大井さんのものも6巻から9巻ということだったんですか。

黒沢 大井さんのものは、量としては6巻から9巻にあたるものよりは、少ないんです。

小池 だけど、1巻から5巻のものも入っている感じですか。

黒沢 といいますか、この6巻から9巻に入っている陳述録というのは、アルファベット

でいうとAからSまでなんですね。ですから、Tがない。そうすると、たとえば豊田副武さんとか東郷外相とか、そういう方のものはないんですね。

小池 でも、豊田副武の回顧録みたいな、インタビュー録みたいなものが防研に入ってますよね。

黒沢 それとは別だと思います。ですから、豊田さんの陳述録は大井さんがもっていた手書きのものを収めております。それと、Tですとたとえば徳川侍従などもおられるわけですが、そういった方のものもないわけですから、その1巻から5巻の中には、それらのものが入っている可能性もあるのではないかと考えられます。

それから木戸幸一さんに関しては、陳述録と日記の写しがセットになったものが別立てで1冊ありました。ただ、これもナンバリングでいくと、防研で閲覧することができたのは3になっておりまして、1と2というものが分からないんです。ですから、ひよっとするとこれも別に2冊あるのかもしれない。

伊藤 それは何というタイトルですか。

黒沢 『戦争指導関係陳述書その3』です。それについては解説でも触れておきました。

伊藤 それは木戸さんの分なんですね。

黒沢 そうです。その他に1と2というのがあると思われませんが、これはどなたのものかは分かりません。この史料も公開されていませんで、分からないということになります。

今回この本の編集をやるにあたりまして、すでに出ております『木戸幸一日記』の中の陳述録とも突き合わせましたけれども、若干の言い回し等の違いがあります。『木戸幸一日記』の中でも、タイプ版がいくつかあることに触れられておりますので、それは特に驚くべきことではありませんけれども、ここで収められているものは、いままで出ている『木戸幸一日記』のものとは若干、てにをはも含めて違う言い回しになっております。おそらくこちらの本の版の方が記録違いをしたのだらうと思われるところもあります。その部分については特別にそこだけ編者注を入れてあります。また、読点の打ち方でニュアンスが違ってくるところもありますので、こうした点も含めて木戸さんのものに関しては見ていただいたほうがいいのではないかと思います。

そこで、これを編集するときにいちばん困りましたのは、そういった編者注をどのように付けるかということでしたが、基本的に言うと、あまり付けませんでした。それはなぜかと申しますと、オーラルですのでご自身が記憶違いされていることもあるわけですから、それを積極的にこれは違っていますと付けて、それにどれだけ意味があるのかということもあるかと思います。それから、当時の記録を見ますと、インタビューのときは、速記者が行くかテープレコーダーを持って行ってありますが、日本語の最初の原稿がどの程度正確に文章化されていたのかが分かりません。さらに東郷さんのように、必ず自分に見せなさいということで、東郷さんが手を入れる過程を経たものもありますが、そうした厳密な本人のチェックがどこまで入っているのか。インタビューを受けられた方がざっと見たことはあると思います。この記述は間違いありませんということで本人が陳述証明書にサインいたしますので、全く見なかったことはないと思いますが、どこまでどの程度見たのかはよく分からないということなんですね。結局いまとなってみると、どの段階で日

本語原稿として間違っただと思われる記述がなされたのか、それがよく分からないということで、そういうものに対してあまり注を付けてもどうなんだろうかと。ですから、単純な事実関係や、固有名詞の間違いなどで注をつけたほうが良いと判断したものや、軍隊、艦隊の略語とか、そういうようなところを中心に入れました。そういう意味では、最初はもっと積極的に入れようかと思っていたのですが、ちょっと躊躇してしまったというところではあります。

なお、この本には、日本語版の陳述録を収めましたけれど、GHQとしての原本といますか、正本はやはり英文ということになるだろうと思いますので、この史料自体の内容や価値に関しては、今後英語版と突き合わせる必要があるのではないかと思います。大井さんのところにも一部、英語版が存在しましたが、あまり大井さんの手元には残っていませんでした。

それから防研所蔵の史料に関して申し上げますと、私が関係したのは、これは軍事史学会編として出されたわけですが、『機密戦争日誌』の一部についてチェックをやらせていただきました。これは、伊藤先生の会長としてのリーダーシップによって出されたわけですが、皆さまご存じのように、防研にはまだまだ重要な史料がたくさんあります。ですから、そうしたものをどんどん活字化していく必要があると思います。石井秋穂さんとか、真田譲一郎さんとか。

たとえば、高嶋辰彦さんには二種類の日記があります。戦前に書かれた日記と戦後にその日記をもとにして自分で浄書されている日記で、内容的に大きな異同はないと思いますけれども、やはりちょっと違うわけです。そういう場合、どちらを活字にしたらいいのか、そういったことも問題になってくると思います。そういう史料もありますので、軍関係でいいますと防研に眠っている個人史料というのは、まだまだ重要なものが多くあるのではないかと思います。

軍関係の史料ということで最後に一つお話しさせていただくと、これもご存じの方が多いかと思いますが、靖国神社の偕行文庫に注目していったほうが良いのではないかと思います。ただし、目録は一応あるんですけども、全て図書扱いで普通の本と手書きの史料が全部一緒に並んでおりますので、一つ一つ丹念に見ていかなければならないという不便さはあります。しかし、偕行社が解散したあとは、偕行文庫に全部奉納されることになっているようですから、偕行文庫には旧軍人のご遺族から寄贈された史料などがどんどん入ってくるのだらうと思います。戦前の陸軍関係の雑誌もあり、コピーなどは、防研でやるより偕行文庫でやったほうが安いものもあるかと思います。それに、靖国神社の崇敬奉賛会の会員になりますと、年会費3000円で本を借りることができますので、これは非常にお得ではないかと思えます。

大体以上のようなところで私の話を終わらせていただきます。

伊藤 ありがとうございます。お話の中にありましたように、私とバッティングしたり、関わったものが殆どでございました。それで、史料の出てくる経緯というのも大事なことだと思えますので、その辺をちょっと伺っておきたいのですが、僕は浜口の日記の存在というのは分かっておりました。それは浜口さんの息子さんのお嫁さんが持っておられたの

ですが、見せるという段階になって、浜口さんのお嬢さんのほうが権利を主張されまして、引きあげられてしまったということで、私は見るができなかったわけです。だけど、黒沢さんたちによってこれが活字になってよかったなと思っておりました。もともと史料を活字にする仕事をするグループというのは、私の周辺にしかございませんでしたが、波多野さんとかその周辺の方々でもう一つグループができたことは、たいへん心強い感じを持っておりました。

それから、奈良さんのものは実はかなり紛糾した史料でありまして、大ピ連と言っていた作家の児島襄さんが奈良家から借り出しまして、奈良さんとの間に約束があったのに、それを守らずに勝手にどんどん使いまくったため、奈良さんがちょっと怒りまして、僕が行ったときには、児島氏とのことがあって、いま自分の手元にはないとかいろいろなことを言うておりました。それで、そのときにいろいろお話を伺ったのですが、枢密院時代のものもあるとか、かなり大量にあるんだという話はされておりましたので、私はその後、例によって例のごとく年賀状で毎年書いておりました。そしたらあるとき、あなたには申し訳ないが、別なところで作業することになったのであしからずという手紙をいただき、多分これはもう一つのグループのほうだと思ひまして、これはなんとかいくのではないかと考えておりました。

そしたら、最初に出すと言ったのは、みすず書房ですか。ところが、みすずでは私の高木惣吉が引掛かかっておりまして、みすずもいよいよ歴史関係の史料の出版の店仕舞いをするというときに、何を残して何を捨てるかという段階になって、高木はあまりにも深く入り込みすぎていて校正が三校くらいまでできていたので、それは出すと。しかし、奈良のほうは断らざるを得ないという話がありましたので、これはたいへんだなど、どこからお出しになるのかと思っていたら、芙蓉でしたか？

黒沢 柏書房です。

伊藤 そこからお出しになりましたので、これもたいへん安心したという経緯があります。ですから、出た結果はいいのですが、どういう経緯だったのかについてちょっと伺っておきたいわけです。

それから、その次の『GHQ歴史課陳述録』については、私は推薦文を書かされたわけですが、あれは黒沢さんがお書きになった解説ですよ。

黒沢 はい、そうです。

伊藤 それで、私はちょっと疑問がありましたので、黒沢さんに直接お電話をして伺ったのですが、やはり底本を何にしたのかについて、あの解説ではよく分からない。特に第一巻、第六巻問題とか、それから大井さんの持っていたものが、どんな段階のものだったのかということですね。それは最終的にタイプになったものなのか、それともそれ以前のものなのかとか、いろいろ疑問があったものですから、黒沢さんにお訊ねした経緯があります。それで、これは言ってみれば、歴史編纂の過程でしばしば行われるオーラルの一種だと。たとえば、書陵部の臨定本の中に談話速記録というものが随分ありまして、あれは『明治天皇紀』を作るときにやったオーラルの記録だと。ですから、いまは『大蔵省財政史』とか通産省の『通商政策史』その他いろいろな編纂のときに必ずオーラルをやっております。

すし、これは『マッカーサー戦史』のオーラルだということで非常に興味をもちました。先ほど、ちょっと黒沢さんが言われましたが、木戸日記の東京裁判期をやるときに、GHQの歴史課が聞き取ったものを木戸さんに送ってあったものが残っていたわけですから、こういうものが全部付けられたんだなというふうに思っております、それで、いま私どものオーラルで過去のオーラルを収集しようという事業をしていたものですから、これは非常にいい情報を得たと思えました。あれは1から5までが見つからないんですか。

黒沢 防研所蔵のものとしての1から5です。

伊藤 だから、6以降のものを全部収められたわけではないわけですね。

黒沢 収めたわけではありません。戦闘に関わる部分はかなりありますが、そうした部分は全部収めているわけではありません。

伊藤 ですから、活字にする場合の選択というのが大事な問題だと思いますので、やっぱりスタンダードをきちんとしておかないといけないのではないかなと思っております。ただ、そのことについて解説に他にこういうものがあるんだよということを明示してくださいだったので、非常によかったなと思えました。

それから、私もこれは誰かに聞いたと思うんですが、大井文書というのは、その後どうなったのかということですね。多分、防研が手に入れたのではないかと思います、防研は全部、原則公開のはずですから、いずれ出てくるんだろうと。それで、黒沢さんたちは、大井文書を全体としてご覧になったのか、それとも陳述録だけご覧になったのか、その辺も伺いたい。

それから、歴史課の陳述録の場合、没後50年という著作権の問題があったのではないか、その点をどういうふうにクリアされたのかということが一点ございます。これは非常に厄介な問題ですが、お金を出して実際にやったのはGHQだと思うんですね。しかし、インタビュー自体は聞き手と話をした人の共同著作物ですから、大井さんが聞いていれば大井さんにも著作権があるわけですし、他の人が聞いていればその人に著作権がある。だけど、これにはいろいろと解釈がありまして、いま私どものところに読売新聞の『昭和史の天皇』のテープを寄託されておりますが、これは個々の記者の著作権は存在しない、向こう側の著作権は全部、読売新聞だという解釈を読売新聞側はしております、これで法律的に絶対大丈夫だということです。ですから、我々が利用する場合には、丸々引用するのでなければいいわけですが、それを著作物や何かにしようと思えば、50年経っていないものについては、談話した人の遺族の了解を得なければならない、そういう問題がいまございます。そういったことで、談話録の場合には、著作権問題というのが非常に厄介だと思って、それをどういうふうにクリアされたのかを伺いたい。

それから最後に、竹下勇からはじまって、井口省吾まで先ほどいろいろなお話がありましたけれども、それをもうちょっとお話しただいたほうがいいのかと思えます。以上。

黒沢 では、浜口のことからでよろしいですか。

伊藤 はい。

黒沢 浜口の日記は、いま先生からお話しただいたように、浜口の四女にあたる大橋富

士子さんがもたれていたということになると思います。しかし、実は私たちがやり始めた段階でも全てをもたれていたのではなくて、昭和6年のところはたしか長男のご遺族のところがありました。ですから、原稿をみすず書房に出して出版作業が始まった頃に、昭和6年分もありましたということで、大あわてで起こした経緯もございます。

伊藤 ここへのアプローチはどなたがなさったんですか。

黒沢 これは全く奇遇というか（笑）、波多野勝さんのおられたマンションのオーナーが大橋さんだったんです。

伊藤 非常によく分かりました（笑）。

黒沢 そういうところから結びつきがあったんだろうと思います。それから奈良についてですが、これは、先ほどちょっとお話ししましたが、『ドキュメント昭和』でNHKの中田さんというプロデューサーの方がいろいろと接触されて、NHKの番組で使うことができることになったようです。

伊藤 その『ドキュメント昭和』の顧問役みたいなことを僕はやっておりまして、それで「奈良さんのところに史料がありますよ」ということを言ったんですね。それで交渉したと思いますよ（笑）。

黒沢 私どもの所には、臼井先生のほうからお話がきたのだと思います。

伊藤 分かりました。

黒沢 そこで早速奈良家にお伺いして、日記をみせていただきました。回顧録は多分、先ほどお話のあった児島さんがもたれていたのではないかと思います。

伊藤 児島さんはいろいろ借り出して返していなかったりとか、そういうものもあるような気がするんですね。だから、心配はしているんですが、児島さんの遺族と僕は接触が全然ないものですから。

黒沢 GHQのほうに比べてよろしいですか。

伊藤 はい。

黒沢 底本については一応、どこに所在していたものを使ったのかということは、各文書の文末に防研所蔵とか大井さん所蔵とか、あるいは『終戦工作の記録』などでしか見つからなかったものもありますので、そういった形で明らかにしたということです。

それで、防研所蔵の中にも同じ文書なのにタイプ印刷の若干異なるものもありますし、文章の一部分に罰点がつけられているものもあって、収録する際にその部分を落としていいのか落とさないほうがいいのか迷うものもありました。ですから、厳密に言えばどのバージョンのものを使っていくかというのは非常に難しい状況でしたが、基本的に申しますと、たとえば、文章に罰点がしてあっても、それらはあえて削らずに全部入れました。話としてはつながっていましたが、何らかの理由で罰点がしてあったんでしょうけれども、最終原稿がどういう形になったのかも判然としませんので、あえていま落とす必要もないだろうということで、そういうものも入れました。ですから、突き合わせられるものは突き合わせて、いま申しあげたような判断はそれなりにしたつもりです。

それから、大井さん所蔵のものは殆どが手書きです。タイプ印刷になっているものもありましたが、これは防研に収められているものとはほぼ同じものをもっておられたというこ

とだと思えます。ですから、手書きのものが最初の原稿です。それ以外のタイプ印刷版が見つかっていないものは、本への収録にあたっては、それしか選択肢がなかったということになります。

伊藤 それには校閲をしたというのは付いていないわけですね。

黒沢 付いていません。ですから、チェックが入っていないものということになると思います。先生は大井さんのお宅にいらっしゃったことがありますか？

伊藤 いや、僕は行ったことはありません。

黒沢 そうですか。立派な書庫がございまして、そこに図書がいっぱいに並んでいます。史料については、自分でタイトルを付けて綴じられていて、何々関係という形できちんとした件名を付けてファイルされていました。全体としては図書の割合が多かったと思えますし、洋書なども非常に多かったですね。

それで、大井さんが亡くなられたあとお聞きしているところでは、手書き文書類は全部、防研が持っていったというか、寄贈されたんだと思います。図書類については多分、防研も全部持っていくには分量が多すぎるということだったと思いますが、手書き文書類は全て持っていったはずですが、ただ、整理がまだできていないために未公開になっているのではないかと思います。あの頃はまだ高橋久志さんがおられた頃だったと思いますがけれども、高橋さんがお辞めになられて、その後はどなたが整理されているのかは存じません。

著作権の問題ですが、それが私たちも非常に気になったところでした、原書房には著作権の心配はないかということで何度も、問題にならないようにいろいろと手をうってくださいということとは申しました。それで結局、何をしたかということ、連絡がつく範囲の方々には、今度こういうものを出版しますというご案内をいたしまして、ご了解くださいという趣旨のお手紙を差し上げました。いまのところ特に問題はないようです。

そこで、『終戦工作の記録』のときはどうだったのかと思ひまして波多野さんにお聞きしましたところ、そのときは全くそういうことはなかったと。著作権という考え方もまだまだ頭のないような時期だったので、特に何もなかったということでした。

それから、著作権については各個人にもあると思いますが、今回の場合基本的に言うと、GHQの著作権というか、アメリカ陸軍の著作権ということになりますので、アメリカ側に問い合わせをしたわけです。直接的には、陸軍の軍事史センターという現在歴史課の陳述録を所蔵しているところに問い合わせました。そうしましたところ、こういう公文書類はアメリカの場合、個々の著作権というものはないと。アメリカの公的機関が所蔵している公文書であるということは何らかの形で明記すれば自由に使ってもいいということでしたので、解説のところではそれに言及しただけということになっております。

小池 前に使ったのは『終戦工作の記録』ですよ。あれはいちばん最初に出したときは外務省編纂でしたよね。

黒沢 それは『終戦史録』ですね。

小池 終戦工作の記録は……

伊藤 あれは個人。

黒沢 あれは別立てで作ったものです。

伊藤 その原本がないというのはどういう意味ですか。つまり、そこからしか取れなかったというのは。

黒沢 その点はちょっと分からないんですが、波多野さんたちのときにも防研所蔵の史料を使われたのだと思いますけれども、私たちが見た6巻から9巻の中には、ないものがあったわけです。

小池 いろんなタイプのもが入っていますよね。終戦後のインタビューが防研に入っていて、そういうものが結構入ってますよね。終戦工作のときには戦後のインタビューも入れたということですか。

伊藤 でも、戦史部が戦史叢書を編纂する過程でやったオーラルは、これはまた別の話なんですよ。

小池 戦史部がやったオーラルなのか、全然分からないものが結構あるのですね。戦史部のオーラルはあまりタイプを打ってないはずですよ。でも、タイプで打ってあるものもあるんです。

伊藤 いや、タイプを打ったものもあるんですよ。

小池 戦史部のものは用紙がありますよね。前書きがあって、これは何年にやったとかいう、お品書きみたいなものがあるんですよ。それも中に入っているの、それから抜いたのかなという気もしたんですよ。

黒沢 それについては分からないですね。

伊藤 戦史部の史料をもう少しきちんとしてもらう必要があるんですね。ただ、全体としてあれは全公開の建前をとったはずですから。しかし、人員が少なくて整理する人がいないという、これはどうしようもないわけです。

黒沢 戦史部は、個人史料の公開にあたってご遺族の了解を全部取ったということなんですよ。

伊藤 いまいろいろ遺族調査をやっているということを知りました。

小池 結構ありますよね。

黒沢 書陵部におりましたときに戦史部の個人文書を見るときも、かなり面倒でしたね。私たちが見せてくださいということで、こちらが初めてご遺族の了解を取り、それによって一般公開できるようになったというものも実はかなりあるんですね（笑）。

伊藤 一般的に言うと戦史部の史料というのは、史料を集積しようという目的で集めたわけではなくて、編纂のために集めたんですね。だから、他のところでもそういうものがたくさんあるわけですよ。それは『東大百年史』の場合もそのために収集したわけです。そうすると、そのときの遺族や当人のお話では、それに使いますということで受け取っているわけですから、だから公開をするときには、公開をしますという了解を取らないといけないわけです。それをちゃんとやらなければいけないということで借行社も防研も、いま遺族調査をやっているという話を聞きました。

それで、いま上原勇作日記を活字にしようとしてやっているわけですが、日記そのものはそれほど大量なものではありませんので、上原が出した手紙を追いかけようじゃないかと。それは、上原さんのお孫さんに勧めてやっているわけですから、上原文書に入っ

ている差出人のほうの遺族を徹底的に調べて、そちらに上原の手紙がいつているはずだからというのでやって、あれば他の史料もあるだろうと（笑）。それで、これはある程度成功するんですね。

というのは、私は山県有朋の書簡集をジョージ・アキタさんと準備しておりまして、まあ、実現していないんですけども、さっきお話になりました明石元二郎から山県に手紙がきているわけです。それで明石さんの遺族を調べて手紙を出して、「山県から手紙がいつているはずだけどどうですか、見せてくれませんか？」といったら、「いいですよ」というので行ったわけです。それで「他に史料があるんじゃないですか？」といったら、「ありますよ」と。「どうするんですか？」と聞いたら、「どうしていいか分からない」というから、「じゃあ、憲政資料室にください」というので、あれは憲政資料室にもらったわけです。そういう類のものが結構あるんですよ。山県の件で結構いろいろなものを入れましたから。

たとえば、渡辺千秋もそうですね。千秋さんのところに山県の手紙がいっぱいありましたので、最初は山県の手紙だけ貸してもらったわけですが、そのうちに説得して、それで結局、全部出してもらったんです。

駄場 初歩的な質問ですが、よろしいですか。亡くなった野村実氏の博士論文にした本の中で大分、所在を明らかにしていない、それこそ嶋田繁太郎とかあの辺の聞き取りがありますよね。それについて防衛大の田中先生に、あれはちゃんと和文タイプにしたものが防研の書庫の中にあると聞いているんですが、それがこれですか。それとも、あれは戦史部ののですか。

小池 戦史部の。それで、戦史部のオーラルはどうなんですか。

伊藤 戦史部のオーラルもいずれ公開しなければならないということで遺族調査をやっているわけでしょう。僕も自分がかつてやったオーラルのテープがあるわけです。それを憲政資料室に寄贈するために遺族と折衝して、公開を許してくださいということをお願いして、そういう形で処理しようと思ってやっているんです。

小池 軍事史関係だと、あと秦郁彦さんのオーラルがありますね。

伊藤 秦さんは史料そのものに関心がないと言っては変だけど。

小池 しかし、ノートの類があるでしょう。『日中戦争史』を書いたときは殆どオーラルで書いたんですよね。

伊藤 だから、テープをとっておられると思いますよ。オーラルの場合、後のテープの始末についてルールがないものですから、それをいま我々のグループで一つの仕掛けを作って処理しようということを考えて、いま工夫をしているところです。

小池 浜口では、名古屋大の川田稔先生が史料集を出されていますけど、あれとの関係はどのようになっていますか。

小池 あの演説集は……

伊藤 あれは活字になったものでしょう。

黒沢 活字になったものだけですね。それから軍人さんの話になりますが、ご遺族の方がまだ公開に踏み切らないということが依然として結構あると思うんです。父親の意向をずっと守っていらっしゃるというんでしょうか。

伊藤 いちばんいい典型は岡敬純ですよ。嶋田さんは少しずつ変わってきていますけれども。いま軍事史学会では、そういうものを遺族の了解を取りつつ、次々と本にしていくという計画でやっておりますので、黒沢さんもぜひ協力をお願いします。

戸高 これも非常に初歩的な質問なんですけど、GHQ関係などでは、歴史課からこういう文書を出せとか、こういうレポートを出せというオーダーがくるわけですよ。それに対してこちらでまとめて返事を出している、レポートを出しているという形のものもたくさんあるわけですね。特に戦史部などの場合には、特定の作戦の編成を報告せよ、というようなオーダーが来て、即答性を求められていたらしくて、第1回回答、第2回回答、第3回回答、これが最終回答みたいなものがあつたりするんですけど、こういったものも含めて、もともとあつたであろう史料の全体像というのは、どのくらい把握されているんでしょう。

黒沢 私はあの中ではそれ以外は発見していないというか、少なくとも防研所蔵の歴史課に関わる他の文書はちょっと見たことがありません。ただ、この本の解説の中にも少し書きましたけれども、アメリカ軍の中で戦史を作るというのは一般的なことです。米軍史料の中には戦史編纂に関わる文書というのは当然、残っているとは思いますが、そこは見ておりません。

伊藤 日本だって日露戦争、日清戦争の戦史を作っているわけだけれども、その編纂過程とかそういうものを研究している人はあまりいないですよ。これはやっぱりやる必要があるんですよ。

戸高 プロセスがよく分からないし、昭和館の場合には、史料調査会の戦史関係の質疑応答文書というのは割合に残っているんですよ。これは触るとボロボロになるような状態になってしまっていますけどね。アメリカ側は割と丁寧に訊いてきて、日本側も丁寧に回答して、足らなかった分をまた追加で回答するという、かなり頻繁な往復が一件ファイルになっていたりします。宣誓供述書みたいなやつですね。とても当人が書いているんじゃない、要するに、誰かが勝手に私は明治何年に生まれましたみたいに書いて、それが2回も3回も誰か中に入ってタイプになっていくというのを見ていると、全体の構造は一体どういうプロセスだったのかが、いまひとつ把握できないところがありますね。

伊藤 木戸幸一の裁判の時期の宣誓供述書は、いろんな人たちに頼んでいるわけです。それを頼んだときに、一般的に頼むのではなくて、自分のほうで文書を作って、それでサインしてもらおうというふうにやったんだと、そう木戸孝彦氏は言うておりました。だから、最後にそれは提出はやめたんです。著作権問題を言ったら、「いや、これは俺たちが書いたんだからいいんだ」と（笑）。

戸高 それは凄まじいことですね（笑）。著作権についてはいちばん問題が大きくて、遺族と連絡しようもない、どんな努力をしても駄目という限界があるわけですよ。ですから、いま丸善さんが国会図書館の戦前の本を全部CDにするときに、これは本当かなと思うんですけど、大体7割くらいまで了解を取って、残りは供託で何とかしてくれと文化庁に直訴していたはずですけど、そういう標準的などこかの線引きというのを作っていかないと、足かせが大きすぎますね。

伊藤 丸善でやったときに僕も随分それは言ったんです。それで、遺族情報そのものが大事だというふうなことを言っていたんです。やっぱりいまおっしゃったように7割とか8割とかそんなもので、あとは供託にしましたということで、僕は「遺族情報を必ずちょうだいね」と言ったんですが、もらっていませんからね。

戸高 だから、私は本当かなと思っているんですよ。本当に7割いつているのかなと(笑)。

小池 聞いてみましょう(笑)。

戸高 ちょっとこれは著作権関係ではこのテーマとは離れますが、昭和館で中央公論のデータベースをやるときに最初の相談に行ったら、いきなり向こうで、「戸高さん、5万人は了解をとらなきゃいけないですよ」と言われたんですよ(笑)。最終的には先ほど先生のお話と一緒に、中公の会社としての事業だということで、中公で了解を出すということでやってもらっているんですけど、何か標準的に納得できる形が必要ですね。

伊藤 これから復刻本などを出すときに、それは非常に大きな問題になってくるのではないかと思うんですね。

黒沢 私は著作権について詳しくはないのですが、たとえばこのGHQ歴史課文書の場合ですと、アメリカ陸軍省なら陸軍省の著作権、あるいはアメリカ政府としての著作権というものを最初考えたわけですが、それとは別に個人の著作権も同時に発生してくると理解してよろしいのでしょうか。

伊藤 そうですね、話をした人は著作権は少なくともある。聞いたほうは、GHQという組織がある人をGHQの一員として聞き取りをやらせたということでGHQの著作権になる。そうすると非常に事柄が簡単なわけです。だから、読売はそれをやってくれたわけですし、何か問題になったら私のほうで処理しますと。

それで、著作権といっても、僕らは読売のテープの複製を作って、公開できるようになったら公開にしちゃうんです。ただ、それを部分的に引用したりするのは構わないわけですが、それを商品として頒布したり何かする場合には、著作権料を払わなければならない、ないしは著作権を放棄してもらわなければいけないということですね。また、50年以上経っている場合は何ら問題にならない。

すみません。内田良平は、どんなきっかけでどんな形で出てきたものなんですか。

黒沢 これも波多野勝さんです。古い話ですので定かではありませんが、彼がご遺族の方に、どういつてだったのかは覚えていませんが、アプローチしたわけです。

伊藤 まさか同じマンションではないでしょうね。

黒沢 それは違うと思います(笑)。内田初恵さんという娘さんにあたられる方が年を取られて手元にある史料をどうしようと思われていたところに、ちょうどいいタイミングで波多野さんが行ったようです。それで、内田良平が慶應で講師をしていたことがあって、波多野さんも慶應出身だということで話が弾んで、それはちょっとしたことですけど。

伊藤 そうということが大事なんですよ。

黒沢 それで、整理してください、整理しましょうということで、すぐに全部持ってきたということでした。

伊藤 その原本はどうなったんですか。

黒沢 常磐大学じゃないでしょうか。慶應に入れるという話でしたが、聞いた覚えはありません。常磐大学に確か史料を扱うようなセクションを作って、そこで所蔵されているんじゃないでしょうか。

伊藤 どういう悶着ですか。

伊藤 長岡外史はどうですか。

黒沢 こちら辺も波多野勝さんのご興味です。彼はあちこちに出向いて探してくるフットワークがよろしい方でして、そういうふうにして探し出してきたものを私とか櫻井氏とか斎藤氏が整理をするという、そういうふうな感じでした。

伊藤 何となくグループになっているわけですか。

黒沢 そうですね (笑)。

伊藤 そうすると、波多野さんに伺わなければならないところがたくさんあるわけですね。

黒沢 ええ。

小池 波多野澄雄さんと勝さんは従兄弟でしょう。何か親戚筋で、もともとが同じ族でしょう。

伊藤 ご先祖といったって戦国時代の話じゃないんだから (笑)。他にご質問はありませんか。特になければ終わりにしたいと思います。

それで、きょうは私がこれからちょっとご説明いたしますが、まだ仮題ですが、日本の近現代の人物史料の事典を出すことになりました……高橋さん、「情報」が抜けていますね。

高橋 この間の打合せで「情報」は抜かすことになったんです。

伊藤 そうですか。いずれにせよ、近現代の人物の史料情報について、これまでここでやってきた事柄を根幹に据えて事典を作ろうということではじめたわけですね。それで、皆さんにぜひご協力をいただきたいということなんですが、きょうお話を伺いまして、黒沢さん、波多野さん等にお願いすべきものがたくさんあるなど、こういう感じを受けました。

きょうお配りしましたものについては、勝手に私どものほうで執筆者の名前をいれさせていただきましたので、これは駄目だから他の人にやってくれとか、それは誰がいいということと言わないと駄目なんですけれども、ぜひお願いしたいと思います。それから、執筆者の欄が空欄になっているけれども、これは俺が書いてもいいよとか、こういうことはぜひ名乗り出てください、そして執筆していただきたい。

そこにB5版の執筆例がございます。もうすでに十幾つかありますが、大体こんな感じでということでもいいんじゃないかと思えます。それで、500人くらいを大体めどに思っているんですが、ここにリストアップしたもので最後のナンバーを見ると561ありまして、あとちょっと広げましたので600を越えると思えますが、この人物の史料は入れておくべきだというのはぜひリストアップしていただいて、自分にふってきてもはかなわないというのであれば、どなたかをご指名いただければたいへんありがたいと。

それから、どの程度お金を使えるかは分かりませんが、どうしても調査のために出張したいという場合にはもちろん考えますので、申し出ていただければと思います。それで、これはちょっと曖昧にしておりますが、執筆謝礼も常識を外れるような安い謝礼を差上げるつもりはありません。いま出版社と大体詰めておりまして、でき上がり原稿の分量に

よっていろいろあると思いますのではっきりは申し上げられませんが、リーズナブルな線でお支払いできると思いますので、よろしく願いいたします。

葉書を入れましたので、これは誰に頼めとか、これが落ちているけどこれは誰に頼めとか、空欄になっているところは自分でなければ書けないとか、誰に頼めばいいとか、そういうふうないろんな情報を書いて投函いただけるとありがたいと思います。

最終的な締切は今年の夏休み明けの9月にいたします。それは、こちらでもいろいろ情報を集めまして、こういう情報を入れたほうがいいのではないのでしょうかというようなこともやりますので、9月に出していただいて3月に原稿を出版社に渡すというくらいのペースでやりたいと思っております。それで、調整の必要もありますので、5月の連休明けに一部でもいいからとにかく出していただきたいというのが希望でございます。自分で史料集を出して解説を書いた場合にはすぐお書きになれるのではないかと思いますので、ぜひ5月の連休明けに出していただきたいと思います。

もう一つ、これは他の人が書くことになっているけれども、それについては自分も情報がいろいろとある場合には、できた原稿をお回しして目を通していただくこともやろうと思っております。それから、これはちょっと言いにくいだろうと思いますが、これは誰々が書くことになっているけれども最適任者は自分だという場合は、トラブルにならないように私どものほうでちゃんと調整いたしますので、おっしゃっていただきたいと思います。

きょうお出でくださった方にはお渡ししましたが、それ以外の方には明日以降、次々に発送することになっておりますので、皆さん、これをお持ち帰りの上、お返事をいただければ幸いです。何かご質問はないでしょうか。

それでは、黒沢さん、きょうは本当にどうもありがとうございました。

(終わり)